

## ● 制作

# 散策交流湿地

## ～都市郊外におけるまちの交流拠点としてのインフラ空間の提案～

高塚啓輔 園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム（主指導教員：武田史朗）

TAKATSUKA Keisuke

### 1. 研究の背景と目的

本研究では、都市郊外において地域だけでなく広域からも人を惹きつける潜在的な緑地空間として、インフラストラクチャのランドスケープに着目する。都市と比べて土地利用の密度が低く都市的利用と自然的利用が共存する都市郊外では、生態系を含めて周辺の豊かな自然環境を活かせることや人々の生活と密接に関わっていることが特徴として挙げられる。国土交通省が発行した『グリーンインフラ実践ガイド』<sup>1)</sup>でも緑や水辺の「保全、管理、再生」を通じて、「交流やコミュニティの形成」などにつなげていくことが考えられている。さらに、水インフラが暗渠化されている傾向が多い都市と比べて、調節池や遊水地等では地上で広い水面をとることができる。

本研究では、後述する埼玉県久喜市旧菖蒲町の小林調節池をケースとして取り上げ、そこに都市郊外における調節池を対象としてその特性やポテンシャルを活かし人やまちのための新たなインフラ空間のあり方を提案することを目的とする。

### 2. 研究の対象

対象地は、都市郊外に位置する埼玉県久喜市旧菖蒲町の小林調節池とした。関東平野のほぼ中央の埼玉県の東北部にあたり、最寄りの久喜駅からは直線距離で約7kmと離れたところにある。現状では主に北側や西側のみアクセスできる。また、市役所前に位置し、周辺の豊かな田園景観や並木、人々の集落に囲まれている（図1）。



（図1：鳥瞰写真、敷地と周辺環境）

### 3. 調査と分析

#### (1) 敷地及び周辺の地形や地質

敷地対象地は、河川の氾濫によってできた谷底平野に位置した窪地地形であり、低湿な沼地質である。また、周辺の集落は台地段丘上に位置している。そのため、地形的特徴から現在の土地利用がなされていることが分かる。

#### (2) 土地利用、水系、生態系

敷地対象地の側を通る「緑と水のヘルシーロード」は、埼玉県の中心からサイクリングやジョギング利用として整備されている。<sup>2)</sup>また、野通川の越流堤からは利根川水系から生き物が流入してくると考えられる。<sup>3)</sup>

### 4. 提案

#### 4-1. 設計のコンセプト

対象地は、開発以前は水田だった土地であり、現在では野通川が側を流れる調節池である。よって、設計対象地では自然再生をきっかけに、地域住民やその周辺からの人々がここを訪れる、または通り過ぎる際に散策することで交流を促す湿地空間とする。また、まちの新しい交流拠点として、これまで人々に見放されがちだった調節池から「湿地池公園」及び「運動池公園」へと転換するように設計を行う。

#### 4-2. 湿地池公園の設計

既存の調節池を二分していた橋をとり払い、遠浅の池にしつつ周辺の水田で田んぼダムを行い周辺一帯で水を受け止める。人々の視線や動きを内から外向きに誘導するように造形することで安全性を確保し、周辺の農地景観や桜並木といった自然環境を借景のように取り込んだ。さらに、水位差の変化パターンにより年間を通じて自然の変化を感じながら人々の交流を促す湿地池公園を設計する。

#### 4-3. 運動池公園の設計

現状では未整備だった敷地に、新たなにテニスコートや多目的コート等の運動施設を設置する。また、観客席やフェンスとなるようになめらかなエッジのある造形を施した。

これまで人々に見放されがちだった小林調節池は、人々が散策することで交流を促すみんなの場所となり、新たなまちの交流拠点として生まれ変わる。また、水位差の変化パターンにより、年間を通して人やまちとの新たな関係を作っていく。

#### 引用文献

1. 国土交通省 グリーンインフラ実践ガイド  
<https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001634897.pdf>
2. 彩の国 埼玉  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0906/863/herusiii.html>
3. 小林調節池・計画図面  
<https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/195273/05kobayashi.pdf>

